



ひんやりとした秋風が吹いたら、赤や黄のカラフルな森のトンネルを通って伝説の山里へ出かけよう。自然が生み出す素材と匠の技を味わいに。

紅葉の山里を訪ねて——泉村

秘境と呼ばれる泉村・五家荘。この地にこだわって創作活動を続ける人たちがいる。こけし作りの谷川さん、草木染めの黒木さん、木工の松田さん、そして葛織りの岡部さん。五家荘が育んだ人と作品を求めて紅葉の山里を歩いた。

▼泉村産の材木を使って、こけし作りに取り組む。

中央町から泉村に入って間もなく、県道247号添いにある谷川秋義さん（六一）宅にお邪魔した。ろくろが回る土間と三畳ほどの小さな部屋が谷川さんの作業場だ。台の上には新作のこけし「鬼山御前」がずらり。「鬼山御前」は、敵方である源氏の若武者と恋に落ちた平家落人の鬼山御前をイメージし



新作に取り組む谷川さん

て作られた。「御前はこんな姿で都落ちしたのだろうか」と想像しまして」谷川さんは脱サラして十五年、「ぶんぶくタヌキ」などを、作り続けているベテランだ。帰りに木鈴を頂いた。どこから鈴を入れたんだろう？「それはヒミツ」。側で優しい顔に仕上げられた「鬼山御前」が出荷を待つて行儀よく並んでいた。



かなりの美人だったという鬼山御前

▼五家荘の生む色にこだわって。工房兼展示場も完成。

次に、樫木吊橋近くにある草木染めの黒木千穂子さん（二八）を訪ねた。工房には、淡いピンクの縦糸と明るいブルーの横糸が掛かった織機が二台。ピンクは紅梅の古木から、ブルーはクサギの実から。黒木さんの使う染料はこの山で採れるものばかりだ。黒木さんは高校卒業後、福岡の染色作家に弟子入り。八年後、芸術家の登竜門と言われる第三文明賞を見事受賞

した。黒木さんは高校卒業後、福岡の染色作家に弟子入り。八年後、芸術家の登竜門と言われる第三文明賞を見事受賞



機織り機に向かう黒木さん

し、故郷へ帰ってきた。賑やかな福岡から泉村へ。「迷いがなかったと言えは嘘になるでしょうね」。黒木さんの作品は、個展または工房で販売されるのみ。「村まで足を運んでもらって、この村から生まれる作品を見ていただきたいんです」。迷った分だけこの地に対する思いも深いようだ。



五家荘の色はとっても優しい色合いだ

▼「五家荘工芸」ブランドは今、泉村から全国へ。

二本杉峠から泉村へ下りてきたとこ



脚が短く安定感のあるあぐら椅子

▼山里の生活の中から生まれた伝統工芸・葛織り。

最後に訪れた岡部久さん（八二）は、村内でも葛織りのできる数少ない



「手づくりのよさを出していきたい」と松田さん

ろ。ピンピンという木を切る音が静かな山に響いている。「五家荘工芸」組合の作業所は元小学校跡。中では、

●梅の木轟公園吊り橋
一本のロープも使わずに作られた吊り橋で、長さ日本一の118mを跨っている。橋から下ると、梅の木轟の滝もある。



●五家荘平家の里
自然と物産、平家伝説など五家荘を知りたいならここへ。山菜料理も味わえる。入場料200円（朝8～17時30分（4月～11月）9～16時（12～3月）年中無休）☎0965・67・5372



●縦木の吊橋
接近して2本の吊橋が架かり、美しい景観をなしている。上段が長さ72mのあやとり橋、下段が長さ59mのしゃくなげ橋。下段の方がよく揺れる。



●緒方家
平清経が改名し、一帯を支配したと言われている平家落人伝説の中の一軒。黒光りする床や囲炉裏、三和土など当時の生活が忍ばれる。



●せんだん轟の滝
遊歩道を5分ほど下ると、高さ70mの岩場から首を立てて落ちる滝壺に到着。夏はひんやり涼しく、秋は紅葉の名所でもある。



▼山が育み与えてくれる



新しいデザインにも挑戦する岡部久さん

一人。「昔は村の男はみんな作りよつた」。岡部さんが、若い頃編んだのもつぱら背負い籠。畑からイモやダイコンなど野菜を入れ、担いで運ぶのに使ったという。九月から十一月にかけて山に入ってカズラを集め、冬場に編む。カズラは黒くて一本一本は柔らかいが、編むとキシキシと強い籠になる。最近では注文が多く、作る先から売れていく。「な〜ん。年とって山仕事ができんこつなつてからの手なぐさみです」。とは言えけれど、デザインといい使い勝手といい、なかなかのもの。村でも編む人がだんだん少なくなっていると聞いた。もったいな〜い。心を残して岡部さんの家を後にした。

鳥のさえずりをBGMに村を歩く。ひんやりとした陰を作る森がテーブルを作り、小枝が鈴を作り、木の皮が薄黄の色を出し、木を伝う蔓が籠を作る。豊かな実りを惜し気もなく与えてくれる森。その恵みに新しい命を吹き込む人々。大きな山と小さな人間。自然と人の優しい関係を実感する旅だった。